每月二回（一日、十五日）發行

明治三十一年十二月二十六日遞信省第三種郵便物認可

明治三十三年十二月十五日發兌

政教時報

第四十五號

目次

社説

◉第十九世紀を送る

論説

◉歳晩に臨みて過去十有餘年間の信仰問題を追懷して將來の希望に及ふ　文學士　加藤玄智

◉大都會　文學士　藤岡勝二

◉免囚保護の第一義　在大學　山川眞純

社會

◉明治三十三年を餞す◉宗教法案提出如何◉第二十世紀大學傳道◉各宗管長會の運動◉西本願寺の潮流◉帝國東洋學會

信界

◉浩々洞に於ける靜觀　多田鼎

會報

◉米國通信の一節　文學士　秦敏之

大日本佛敎徒同盟會綱領

一、佛敎本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛敎の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛敎護持の責任を全ふし、健全なる宗敎界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、公認敎制度を調査すること。

六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。

七、佛敎の精神に基ける諸種の敎育特に普通敎育女子敎育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、敎界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勦絕する事。

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛敎の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政敎時報第四十四號目次

社説　新小學校令に對して敎家の注意を促す
論説　政敎（蜷川行道）◎身體と精神とに就て（西山榮久）
社會　東西兩本願寺の確執等
雜錄　偶感數則（常磐文學士）
信界　行爲の主力は何れに求むべきか（佐々木月樵）
會報　四恩瓜生會大會の景況

本誌廣告

一、本誌は每月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれは御注文に應せず
一、本誌代金は必す小爲替にて遞送の事但し郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國無遞送料
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢
一、爲替振込局は「本鄕森川町郵便局」爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本鄕森川町一番地大日本佛敎徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十三年十二月十四日印刷
明治三十三年十二月十五日發行

發行兼編輯人　上村幸三郎
印刷人　清水朝太郎

東京市本鄕森川町一番地
發行所　大日本佛敎徒同盟會出版部

政敎時報

第十九世紀を送る

世の進歩は固より連續的にして、一方面より觀る時は一段落をなし、一時期を劃する如くなるも、之を他方面より察する時は、不可分不可離の關係ありて、循環際なきが如くなるは勿論の事といふべし、然れども吾人の研究に便せんが爲め時期を區劃して考察する時は、又自ら時代に特質ありて、一時代を他時代より區別し、得るものなり、彼十五世紀には漸く中世的氣風を脱して、人心活潑となり、盛に諸種の發明、地理上の發見等ありし如き、十六世紀より十七世紀の中葉に至る迄は、歐洲の天地は宗敎改革の渦中に投ぜられて、人々他事を顧みるに暇あらざりしが如き、漸く宗敎改革の動搖の鎭靜に歸せんとするや、諸大國に革命相繼ぎ、興亡殊に激しく、以て最近世列國の形勢を現出せり、其間又諸强國の殖民政策を講ずるあり、又思想界には大哲學家の出世、大文豪の興起あり、以て十八世紀を終れり、十九世紀は十八世紀末の諸豪の出演中に入り來り、奈翁一世に對して、國民的思想の勃興によりて、序幕を開き、政治上には立憲政體の確立、外交術の進歩、武裝的平和の維持等其最顯著なるものにして、智識上の進歩は殊に著しく、地理上の發見に於ては、英露の探險は、北方及中央亞細亞の通路を開きしを始めとして、ニル河の水源を究むるあり、亞弗利加內地の闇黑を破るあり、其功殆ど十五世紀と伯仲の間にありといふべし、科學の發明には、獨人マイエルのエネルギー說、英人ダルヰンの進化論を始め、其他史學、天文學、醫學、數學等皆著しき進歩を呈し、應用科學の發明には、英人ジエームス、ワットの蒸滊機關の完成、米人ロバート、フルトンの蒸滊船創造、英人ジョージ、スチーブンソンの蒸滊機關車、英人ホヰートストン等の電信機の四大發明を始め望遠鏡、顯微鏡、電話機、寫眞術、幻燈、蓄音器、活動寫眞、レントゲンのX光線、ハムマーの繪畫電送機の發明等あり、其他工藝上には驚くべき精巧の器械の發明ありて、眞に前世紀に比して別世界の觀あり、殊に軍器に至りては進歩最彰明にして、戰術を一變せしめ、就中海軍は發達驚くべきものあり、又航海術、造船術の進歩につれて東西の諸國、南北の諸地互に交通して、通商貿易を盛ならしめ、世界の經濟事情をして關係を密邇ならしむ、其發達の顯著なる眞に前人に誇るに足る者あり、

然れども今世紀の文明は要するに、物質的方面に盛にして、精神的方面に至りては、其進歩は常に一歩を後れ居るの憾なくんばあらざるなり、見よ哲學家には、コムト、ショッペンハウエル、ハルトマン、ヴント等の諸大家ありと雖も、カント、ヘーゲルより幾何を進めたるぞ、スコット、ディケンス、等を始め、大文豪の名を聞くこと、十指猶數へ盡し得ずと雖も、能くシエークスピーア、ゲーテ等を凌ぐや否や、美術界亦ミカエル アンゼロ、ラフアエルを瞰下するの士を出せるを聞かず殊に宗敎界に至りては頗る寂寞の感なくんばあらざ

るなり、宣教事業の盛大なるに至りては固より前古に比無かるべし、歐米諸國の傳道會社が巨額の貲を投じて、世界各國に教會堂を建設し、傳道牧師を送り、聖書を各國語に飜譯して、宣教に從事せしむるが如きは、世界の歷史に未だ見ざるの盛况といふべし、然れども教會組織の膨大は直に余輩を滿足せしむる能はず、到る處に天父の德を頌する宣教師の盡力は果して生靈の救濟に幾何の補益かある、余輩は彼等宣教師が傳道の動氣如何を知らず、又彼國傳道會社の弘教の目的那邊に存するやは知る所にあらずと雖も、其結果其實情に於ては、之を布哇の亡國史に徵し、之を支那の現狀に察するに、宣教線の廣る處、每に慘怛たる悲劇の伴ふを見る、抑文明は水にも譬へつべく、常に低きに向て流入するものなれば、西力東漸は固より理數の然るべき所なりと雖も、彈丸を以て之を授受し、軍艦を以て輸出入せんは樂ふべき所にあらざるなり、學者、政治家、軍人、商人、其他總ての人士は、軍艦を以て、銃砲を以て、文明の强賣を爲さんと試みるも、惟り宗教家は中間に入て、平和の授受を了せしむべきなり、之れ平和の福音を宣傳すべきは、天與の聖職として負ふべき責任なり、然るに今や宣教師來り、次に領事來り、而して銃砲來るとの流行語を聞くに至りては、豈悲しからずや、寧ろ世界宗教家の耻辱にあらずや、余輩は博愛の福音を唱道する宗教家諸氏の一考を煩さんと欲するなり、

然りと雖も、世は一足飛びの進步を許さゞるなり、耶蘇教は其宣教の初に於て必ず血を見の歷史を有せり、基督彼自身も、從來の宗教と衝突し、時の政府と抵牾し、遂に十字架上に刑せられたり、ルーテル、カルヴヰン等の新教を唱ふるや爲に百數十年間、歐洲全土を擧げて流血の巷と化せしめたり、我日本に入るや亦流血の歷史を有す、而して後漸く調和し、同化するものなり、去れば今日の如き寒心すべき活動は速に跡を收めしめんと切望す、是蓋し彼徒の傳道をば幼稚の狀態を脫して速に成長せしめんとの親切心と、一方には大に世界の不幸を緩和せんと欲するに外ならざるなり、余輩此傳道上の蠻態稚狀の十九世紀と共に過ぎ去り、二十世紀の新天地には跡を止めざらんを希ふ、

我邦は大凡半世紀前を以て、世界の仲間入りを爲し、萬里の同風に吹かるゝに至れり、固陋なる攘夷說時代より、現今文明時代に至るまで各般の事業皆目覺しき進捗を爲し、黃色人種の爲に萬丈の氣焰を吐くと雖も、最も進步に後れ萬事に隔靴搔痒の思に堪へぬは、宗教界を以て然りと爲す、政治、教育、文學、工藝等百事皆面目を一新せるに、惟り宗教のみ依然たる吳下の舊阿蒙にあらずや、否寧ろ士人をして、宗教は文明社界に不必要なり、世の進步に轉比例して、宗教は退却すべしなどいふ妄論を敢てせしむるに至れるは、遺憾にあらずや、噫十九世紀の宗教家は、先人に對して決して抗顏し能はざるなり、古人言へるあり、既往は咎めずと、今や悔ゆるも及ぶなし、是に於て此不面目なる十九世紀(宗教家に取て)を早く送り、早く新世紀を迎へて、活潑々地の運動を敢てすべきなり、噫往け汝十九世紀、

論說

歲晚に臨みて過去十有餘年間の信仰問題を追懷して將來の希望に及ぶ

加藤玄智

年光玆に殘せんとして、世事漸く匆忙を加ふ、弊衣蓬髮、草茅屋裏に、一陽の來復を迎ふるの我れは、取り立て、別に變はりたる事も無けれど、筆硯寧日なきの故を以て、久しく本誌にも、疎遠となりたる余は、今回本多文學士の是非とも、余に一文を草してよとの高囑、もだし難く、止むなく、新らしき思想とては無けれど、平素所懷の一端なる、信仰問題の趨勢の一瞥を記して、以て本誌に寄す、讀者幸に之を諒せよ。

今を距ること十有餘年、即ち明治二十年の前後に當りてや、佛教社會は、西洋の自然科學が、我國內を風靡し去り、佛教の敵たるものは、科學なり、佛教の須彌山說を排擊し、佛教の法田を蹂躙し去るものは科學なり、佛教家たるものは、宜く力を盡して、その防禦に當らざる可からずと、うろたへ回はりたるの日に於て西洋の科學思想の卷席に當りて、孤城落日の法壘に嬰守せし、一方の驍將は彼の佐田介石氏ならん、當時井上圓了氏が、日新文明の教育に養成せられたるも、尙ほ宗教の敵は、科學に在りと思惟せりと、自ら公言せられしに非ずや、而かも當時の碩學鴻德の輩は、井上博士と與に、宗教の援軍を哲學に藉り來り、帝國大學が印度哲學の名稱の下に、佛教の學科を設置せしを幸として、佛教は哲學なり、佛教の幽玄高遠なる、遙にスペンサーの不可知論哲學に超踰するものなり、佛教の哲學として、深邃玄妙なる、豈に洋教耶蘇輩の比に在らんや、今や西洋に在りても、哲學の旺盛と共に、耶蘇教は漸次その勢力を減衰しつゝありて、漸く將に、その殄滅に歸し去らんとす、我國人たるもの、宜く當さに、斯く世界の諸宗教に冠絕し、諸科學の上に卓立せる、萬學の王たる哲學を以て其根基となしたる、我が佛教に歸依す可しと、さも得々然、雜誌に演說に、佛教は哲理宗なりとの、一種無限の妙響を、佛教徒の耳朶に傳へたる、極樂の音樂的名稱は、我國幾萬の圓顱をして、佛教眞に復活せりと思惟せしめ、蘇生の思あらしめたり、是れ實に、佛教を哲學に由りて、辯護し、信仰問題を哲理的に解釋せんと、企圖せしものと謂ふ可きなり。

雖然、哲學や固と是れ、宗教に反對して興り、元來批評的なる希臘人の、思系を遂ひて、發展し來り、以て近世に至りたるものなるを以て、その批評的精神の產物たる、哲學が相承的教權主義なる、所謂成立宗教に、全然どこ〳〵迄も、忠實なる好伴侶なるや否やは、頗る疑はしきものあり、既に近世初に於て、一たび基督教に謀反したる哲學が、同一宗教たる佛教にのみ、獨り斯くばかりに、忠僕たらんとは、實に思ひも寄らざる事ならずんばある可からず、此に於てか、一旦哲學の武器を藉りて、一方には基督教の法壘に對峙し、一方には自然理學の攻擊を防衛したる佛教も、外侮の守備漸く

成りて、而かも未だ全からざるに當りて、端なくも、再びその攻守同盟を締結せる、哲學そのものとの、不和を釀發し來り、佛教は自己の用ゐたる、武器を以て、將に自殺せざる可からざるに至るや、昨夢漸く覺めて、佛教家中、彌陀の實在を教へ、極樂を西方に主張せんと欲するや、佛則ち曰く、佛教は宗教にして、哲學に非ず、哲學と宗教との兩者は、その範圍の同じからざるものあり、然れば佛教にして苟も宗教たる以上は、哲學以外、裕にその存在の餘地を占有し得可し、果して然らば、佛教が西洋哲學の理に合はざればとて、佛教に於て、何にかあらんと、嗚呼此に至りて、嚮者に井上圓了氏等に由りて、辨護せられたる、佛教の哲理家たる所以は、再びその根柢より土崩瓦解せられ、哲學と宗教との連鎖は、此に切斷せられて、西洋に在りて、トーマスアクイナスの知信合一説が、ヅンス、スコッスや、オッカムに由りて、截斷せられ近世シユトラウスが、哲學と宗教との關係をして、風馬牛の相及ばざるが如くならしめんと試爲したるの感なくんば非ず。

此の如く、一旦哲學の保護に由りて、その生命を繫ぎたる、佛教が、哲學と離緣せざる可からざるに至るや、信仰上の不安は、層一層その明斷を致し來り、各宗各派の青年は、層一層自己信念の、飄々乎として、浮萍の今日は向ふの岸に咲くの感なき能はず、信仰の根基、その堵に安んせざる、蓋し今日より甚しきは、無かる可きなり。

今や既に佛教は、哲學上より、彼是れ是非す可からざるものとなれり、此に於てか、佛教を辨護せんとする者は、勢ひ佛教を以て、單に感情に在りとなし、――シユライエルマッヘルの之れを試爲し、而かも失敗したるが如くし或は歸命の感情と云ひ、或は宗教は燃へるが如き感情に在りと說き、その極宗教を以て、盲動的感情と化し去らしめんとするに終はれり、

嗚呼彼等は眞に、之れを先きにして、フユームが、宗教を、その理論的證明の、不可能なるを觀破するや、之れを習慣上、しきたりとして、實用にさへ立たば、それで、宗教の能事は終はれりと說き、之れを後ちにしては、ゼーレン、キールケガルドが、之れを試爲したるが如く、宗教は宗教の眞性上、既に背理たらざる可からざるを肯定し、而かもそを以て、宗教の特色として、發揚鼓吹せんとするに至るに終はれり。

然るに今、眼を轉じて、我國に於ける、基督教社會の有樣を一瞥するに、彼れに在りては、嚮者にその勢、一時文明國の宗教てふ、看板の下に、我邦の人心を風靡せしも、忽ち佛教徒が、哲學の武器を藉りて、之れを攻擊せしに、もろくも、一敗地に塗れしより、彼等の慧眼なる、最早や自家宗教の、元來哲學的ならざりしを自覺し、再び教理の上には、佛教と、中原逐鹿の事に從ふを止めて、退いて、諸多の社會的事功の上に全勝を博せんと、孜々努力しつゝあり、而かも頗るその成績の緒に就きしものあるを見て、佛教徒は、他山の石、以て玉を磨く可く、是れぞ、實に今や佛教が、一たびは哲學と同盟して敗北し、一たびは宗教の唯感情主義を主張して、徒らにその盲信的盲動的に趨逸して、却て佛教は、日に愚夫愚婦間の迷信と、何等の擇ぶ所無く、識者の擯斥する所となるの危

期に於て、崛強の逃匿所なりと思惟し、忽ち說を爲して曰く、宗教の要は實踐躬行に在り、實踐躬行に伴はざるの宗教は、空論なり、佛教徒たるもの、何ぞ區々たる理論の上に勝敗を決せんやなどと、大言壯語して、濫りに宗教上の、盲動瞽從主義を主張して、僅に佛教の命脉を浮薄なる事功の上に、維持せんと企つるに至れり、而かも是れその實、佛教徒たる者が、理論の上に見事失敗したるの結果、事功の孤城に退嬰して、僅に奄々たる氣息を、旦夕に維繫せんと擬するものなり、是れ實に佛教界に於て、昨今淺薄なる、實踐主義の流行する所以にして、彼等の心事、又憫殺に堪へざるものあり、嗚呼彼等は佛教中には、哲學上、無價の寶珠ありて、潜在しをるを知らざるか、何ぞ濫りに、佛教を目して、哲學に非ずとなし、強いて淺薄なる事功主義の下に、その逃匿所避難所を求めんとする、然れども此に至りて、吾人は一の彼等に問ふ可き事あり、そは他に非ず、斯く宗教上の理論的根柢を避け、宗教的感情の鼓吹も、思ふ程にゆかざる所よりして、遂に何等の主義、根本義の、その宗教意識の根柢を爲すものを有せず、唯漫然、功を淺薄なる實踐主義に收めんとする彼等は、何の理由に依りてその事功を宗教若くは宗教的事業と名くるを得可きかと是れなり、斯かる動機より起れる行爲は、慈善事業と云はず、學校設立と云はず、吾人が偶々秋晴に乘じて、馬を郊外に馳せ、日光三尾の山に楓葉狩りに赴くと異るあらんや、是れ豈に學校營業者が、學校を起し、市民が市稅にて、養育院を設くると、何んの差異かあらん、此の後者が、宗教的に非ずと云はゞ、と同樣に、前者も亦宗教的に非ずと云ふを得ん、余は實に斯く、何等の信念の動機、內に感發して、而して後ち初めて、外にその行爲として、發表し、慈善事業社會事業として、喚發し來るものに非ざるよりは、之れを宗教的と稱するの、何等の理由あるを、發見する能はざるものなり、宜なり、斯かる宗教的內容の動機を缺ける事功が、宗教家の手に由りて起され、宗教上の機關を通じて、企劃せられ、而かも一も滿足なる結果を見るものなき、見ずや、彼の感化院の設立は、屢々本誌上にも、反覆慫慂せられ、而かもその成功を見る能はざる是れ眞個に、內に深く蓄ふ可き、宗教的信念の確定したるものゝ無きに由らずんば非ず。

以上論明せし所、之れを要するに、近十有餘年間に於ける、佛教界は、その當初、佛教を哲理に由りて辨護し、哲理と調和せしことありしが、その企圖にして一朝廢るゝや、變じて佛教の歸托は、漸々智性と絕緣したる、感情上に置かれ、而して今や更らに再變して、佛教の庇護を、淺慮姑息なる、事功主義に求めんとして、却て事の當を失し、以てその事功の、佛教的と稱す可き特徵を喪ひ、毫末もその奏功せられたるものあるを聞かず、是れ豈にその事業が、宗教的信念の、內容の動機を、毀損しをるの致す所ならずや、嗚呼我國に於ける、十九世紀末の信仰問題は、斯かる趨勢を取りて進行し來り、而かも斯かる危期に際せり、去れ、明治三十三年よ、來らん明治三十四年、來らん二十世紀の新天地は、斯る姑息なる、彌縫的解釋に由れるの、信仰問題を、全然排斥し去りて、健

全にして新清に、眞摯にして深遠なる、信仰問題の解答たらずんばある可からざるなり。

大都會

藤岡勝二

人口が多いから大都會といへるなら、支那の北京はたしかに大都會である。日本の東京のよりは二十萬も多いから。しかし都會の都會たるところがあるかといへば、道路は雨に汚れ乾けば砂ほこりが立ち揚て、放尿放何隨分亂暴狼藉な姿だと聞けば、人口が多いからとて、大都會の價はないといはなければならぬ。鐵道が蜘蛛の網の様に引かれて居る、年毎に四萬以上の人口が増加すると云て名高い倫敦でも、饑寒窟には無賴の悪徒や詐僞掏盜を營業の様にして居るものが甚多いとして見ると、大都會といはれるのは全く皮相の話であつて、大都會は即ち安樂の境なりといふことはいはれない。まして皮相も至極あはれなもので、すこし氣を付けて見ると、全市が悉く鍍金的であると云つた日には、大の何のと實は恥しい限りである。世の中は目鼻がそろつてとにかく立つて歩いて居るものを人間じやと云つて居るのであるから、東京でもやはりその理窟で大都會じやと云はれもし、又云つて居るのである。やれ紳士じや、やれ淑女じや、やれ大政治家じや、やれ大富豪じやと云つて居るのも此通りではないか。もしこの通りであるとして見ると、世の中は無垢より鍍金の方が貴いのかもしれない。所謂大都會東京である、こゝに住で居る大貴紳大富豪何でもかでも大々的の大得意、大の字も大安賣になつてしまつて遂に大は小より憐れなものになりはせぬか。黄金も鍍金がはやり、合成金が出來、人造金が用ゐられるとなると、まだ〳〵無垢の銀の方が正直に見ゐて心ある人はその方を好むかもしれない。大都會の名も亦ありがたくないではないか。

鑛毒事件とか云ふ様なものは、根が鑛山であるから都會の眞中に起らう筈はないが、其他の收賄じや、三醜じや、買收じや、何やらの破裂じや、解散じや、分裂じや、破産じやといふ様なものは何處に多いか、何處にはやるか。皆此大都會の特産物の様になつて居るらしい。これらが多いのが、即ち大の大たる所以で、卸しやには種々の品物が澤山ある理窟だ、と云へば云はれるかもしれないが、大理石の馬小屋もあまり感心したものでないから、吾等は馬小屋の馬小屋らしい方が餘程結構だと思ふ。さすれば金色燦爛たる光景は目に見ることが出來なくても、人間の罪業の臭味がない田舍の方がはるかに有難いと云はなければならぬ。ことに田舍には紅塵萬丈とか云つて奇麗な様で奇麗でない文句を戴かない、空氣清鮮、天然の光景自ら愛すべきものがあると同時に、ダイヤモンド入の金環がはめられて居るよりは骨高まり肉かたまりて數百の金塊もこれで以て掘り出すとが出來るといふたのもしい指も、朝に絹布を纏ひ夕に之を典物にするといふ極樂よりは麥飯を食ひ粗衣を着て一家の和氣が勞働と共に續き保たれて居る末長い家も、却て否質に田舍にあるとして見ると、極樂の

ありところは都會よりは田舍に多いかもしれないのである。」それに近頃田舍の人も赤毛布を脱してショールを被り、管笠を廢してパナマの上等を選ぶといふ風になりたさうな。ほんたうにさうならこれはいよ〳〵魔睡薬がまはつたのである。金融の豊かになつた影響だとは云つて居るもの〻、この大都會の今日の銀行の有様はどうであるか。會社の恐慌はどうであるか。田舍ばかりは金融がよくて都會ではわるいのであらうか。日本の大銀行がなぜ心配をするか。よく考へて見ると一般に増長した結果ではなからうか。自ら増長しておきながら増税がどうだとか、かうだとかいふのなら始めから増長せぬがよくはないか。田舍にをごりが及ぶときは東京はそれより甚しいに違いない。して見るといよ〳〵天下全體にしびれだしたのではなからうか。世間一般がをどりつかれたのではなからうか。

都會は腐敗する、田舍は驕奢に流れ出す、氣慨のあつた江戸兒は跡かたがなくなり、正直な種まき權兵衛も姿をかくしたとすると、これはそも〳〵どこが病み付きの本であるか、だれが毒薬をふりまいたのであるか。とても其根本から求めてかゝらぬとなほすのになほし様がないと思はれる。それはもう云ふまでもないことで、田舍の人が受賣りをしたのもわるいにはちがひないが、どうしても卸し元の罪といはなければならぬ。ことに田舍にはまだ〳〵有難いたのもしいところがあるのであるから、今しつかりと卸し元が改正をしたら受賣りの方は直になほるにちがひない。

そこで中央の大都會東京の裏面になさけないことが多いのを一掃しやうとするにはどうしたらよいか。やはりこれも根本的治療にあるので、人の心からため直さなければならぬ。その處法は宗教と教育との二つを用ゐたらよからうとおもふ。さてこの二つは今までに用ゐてないかと云ふのに、それは〳〵なか〳〵用ゐてあるのである。しかしその用ゐ様がなんだか親切にない様に見ゆる。教育の方で云つて見ても、明かに學校の整頓、教員の熱心、教育の普及といふ様な事は田舍より劣て居るところが多い様である。根が寄合世帯であるから熱情に乏しい眞實の愛がないといふ様になるのではあらうが、大體燈臺もと暗しといはうか、足元が明くないのである。負ふた子に教へらるると云はうか、教育者に意氣地が少ないのである。なるほど理窟から云はすと御尤なことは皆々盛に云はれるさうであるが、實績が上つてないところを見ると、かういふ風に世間から見られるのも是非はないであらう。無論吾等は精しいことは知らないのであるから、かういふのは無責任の空論であるかもしれないが、隨分人々からこんなにいはれて居る。であるからどうしてもこゝは一番骨を折つて改良しなければならぬ。市の教育會が出來たから、着々改良も出來るつもりであらうが、どうも只組織の改良ばかりに走りて居て、根本のことを改めない様では、教育會も世間並々の會社の様に重役の爭ひやら、くだらない騒ぎになつて仕舞はぬともいへない。ことに田舍の教育者は、東京に模範を求める勢は始終絶えないのであるから、これは市の爲ばかり

ではない、全國の爲と思てやつてもらはねばならぬ。へたをすると田舍の實地に堪能な敎育者の方に負けることになる。」

宗敎の方はどうかと云へば、これはまた妙な方針がある樣に見える。一體傳敎者は兎角田舍にのみ着眼をして居て、都會の方は割合に御留守になつて居る樣にも見えることである。京都は大本山がいくつもあるから所謂御膝下で何でもかでも一番勢があつて最もかたいと思て居るのかもしれぬが其實は一向振はない。田舍の人から見ると、京都に居る人は極樂に最も近いて居る樣な氣がするかもしれないが、其實最も遠かつて居る。見ない內が花とかいふ諺があるが、これは丁度田舍の人に對する京都のとであるそ。れと同じ樣に夜目遠目傘の內遠いところから東京を見て居ると、いかにも何でも盛なもので宗敎も勢があるであらうと思ふ人があるかもしれないが、實はさうはいつてゐないから殘念である。大都會は凡ての王ではないといふことになるのである。さてこれはなせかといふと、これには都會の繁忙な爲に、これ日も足らずで、ゆつくり心を修め樣とする暇がないからである、といふ邊もあるかもしれないが、やはり傳敎が行き届かないのであるといはなければならぬ。

宗敎の宣布者はとかく未開の地に踏入らう、草深い田舍に入り込まうとする風がある樣であるが、これは知らない者に知らせ、さとらない者にさとらせ樣との主意に違ひない。ところが內國の田舍まはりはどうであるか、未知者は都會より多いかといふのに、それは全く反對の事が見える。田舍の方が今では都會よりははるかに宗敎の點に於ては心強い人が多くて都會にはこれに就ては全くわからない人が多いといふ事になつて居る。加賀はどうか、越中はどうか、九州はどうか、とだん〳〵見て行くと東京附近が最もなさけない有樣になつて居る。これは宣敎者も知らないのではない、能く知つて居るらしい。さてその知て居るのがもとになつて手を附けないのではないかと思はれることがある。

これは頗る變な現象ではあるが知つて居る爲に手を附けないとは何の事かといふと、所謂勸財のことが効を奏するか、どうかといふことを知つて居るので、本當に宗敎の宣布が行き届いて居るかどうかといふことを知つて居るのではないらしい。布敎は知らないものに知らせ悟らない者を悟らせるといふのが主意であるとして本當に宣布が行き届いて居る居ないを知つて居るならば、まだ宗敎を知らない都會に布敎すべき筈である。都會に布敎することをつとめないで、田舍まはりの方に力を用ゐて居るとして見ると、田舍の方が宗敎を知らぬものが多いと思つて居るのか、又布敎の本旨を知らないのか、又は本旨は知つて居ても他の事情の爲にさうするのか、何れかでなければならぬ。しかるに、布敎者は田舍の方が宗敎を知て居るといふことも知り、布敎本旨もしらぬのではない。して見ると他の事情の爲に、みす〳〵力を用ゐねばならぬところをすてゝおいて、その事情に都合のよいところに向て居るのであるといはなければならぬ。その都合のよいところはどんなところかといふと、宗敎心のあるところであるといふことになる。そこでとう〳〵布敎は宗敎心のあるところにするといふことになつて、つまり布敎の本旨は忘れられて居ることになる。それは忘れてもよいかどうか。忘れてならないならば都會の方にちと力を用ゐてはどうだかと思ふ。

さて都會に力を用ゐる主意は先に云つた樣な害毒を絶して其上に宗敎心を植ゑ付け樣とするのであるから骨が折れる。ことに田舍の樣に利得がさしあたりないとすると苦しいこともあらう。しかし利得は布敎の本旨でない、心地の開拓が目的であるから骨が折れてもせねばならぬ。從て其方法も大に趣をかへねばならぬことになる。いよ〳〵これが効を奏したら田舍は無論たやすく化することが出來るからどうしても都會に着眼せんことを思ふのである。

大都會の大都會たるところを顯はさしむるのは以上の二方法であると思ふて一寸一言。

免囚保護の第一義

山川眞純

「一度罪を犯せるものは再犯すならん」、然りこは事實である、過を再せずとは聖人君子の事で我々凡俗の事でない、一度手綱許せる心の駒の逸するを引止むるもの、なか〳〵容易でないことは我々の經驗する所である、抑免囚人とは何であるか金看板の罪人なのである、我々は如何して此罪人を近けることができやうぞ、如何してこの罪人を恐れずにおけやうぞ、其看板を見れば直に明に彼は再び罪を犯すならんと讀るゝのである、此の如くにして隣人は彼を疎じ、朋友も彼を顧ず、甚しきは夫婦兄弟すらも彼を絶ち、社會は全く彼を見放すのである、

彼も社會の乳を飲て生長したものである、彼も多少の能力を有するものである、否なか〳〵驚くべき才幹をさへ有するものがある、かゝるものを終生日蔭ものとして朽果しめんと、如何に憐なるよ、如何に惜むべきことなるよ、況して彼は我々が想像する如くに望なく又恐ろしく又鬼にても蛇にてもあらざるものを、彼も人の子なり豈良心なからんや四隣閴として風靜なる夜半、時にその聲にきゝ心機一轉屢々正路に復らんとした、然も我々の偏狹なる彼等を容るゝの餘地を與へぬのみならず、其道をさへ閉るのである、――彼等は社會がこの悔改めたる己を遇すること尙蛇蝎の如く、世の中の全く四尺五寸になりて、五尺の躰の置き處なきに苦み、先に一度腰にせし鐵鎖の今も尙我身に纒綿して些の自由をだに得ると能はざるを見「惡名を負ふものは半絞罪に處せられたるもの」なるを感じ、玆に彼は憐むべし眞面目なる生涯に望の絶へはてゝ、ヤケを起しヤブレカブレダ皿迄モといふ、最も恐るべき新生涯に入ることゝなるのである、この生涯に入ればなか〳〵に正路に復ること難かしく、最も多く社會に害毒を流すものが最も幅のきくので、其報酬として時々官費の生活を營み、苦役の集治監をも御殿（實際彼の社會にては然か呼で居るのである）と心得て居るのである、彼等自身は勿論我々が彼等によりて受る損害の大なるとはいふ迄もない、然し彼

等の堕落をしてこの極に達せしめた其責は我々も負ねばならぬのである、何故なれば前にも述た通り彼には屡々良心の愛らしき芽は萌したのである、これに對するに我々が同情の暖き春風を以てしたらんには、麗しき花を開き、美しき果をも結ぶべかりしものを、無殘にも秋霜の如き無情を以て冷き嘲と笑を以て我々は彼を遇したのである、免囚といへば悪魔の如く心得、蛇蝎の如くに取扱ひ、彼に一夜の宿をも借さなかつたのである、過般沈没せる商船學校の練習船なる月島丸も、設令既に航海前に船体に多少の破損のありしにせよ、暴風怒濤の彼を苦むること彼の如くならざりせば、決して百有餘名の有望なる青年を失ふことなかりしものを、吾々も免囚に對し今少しく寛大に、今少しく親切なりせば、如何に多くの有為の材を救助することができたであらふか、我々が薰蕕併せ焚た為に、――彼が如何にして罪を犯したか、又今は如何なる狀態にあるかをも頓着することなく、一度も彼に耳を貸たこともなく、頸をも傾けなかつた為に、一擧手一投足の勞をも取らなかつた為に、憐れ無數の望ある人の子を海底に葬つたのである、

我々はこゝに尙讀者諸君と共に一考すべきことがある、免囚とは我々が彼等を遇する如くに望なく又疎ずべきものなるや、又我々自身は彼を嘲、彼を疎ずるとの出來る程立派なるものなるや如何に、自身の事は棚に上て他人の品定ばかりせずに只今より私共の棚おろしを始めて見やうと思ふ「貧の盜」といふ諺があるがこは、明に境遇は人の志を移すものであることを示すものである、罪を犯すもの、多くは境遇の為に動されたのであつて、有名なる精神病學者モーヅレー氏も犯罪の動機を研究して、かくいふて居る「爰に人あり、其他人の犯せしが如き罪を犯さざる所以は、必しも其心性、他人に比して精強且善良なる故でない、又神の寵裕加護が豫め其人をして然らしむることに歸することもできぬ、其生活及職業の事情に於て十分の誘惑これなき故である、罪悪の産出は他の人事と同じく、時と場合とに大關係ありて、兩者の力最も大である、されば打勝難き誘惑に屈從して、僅に罪を造る所の人を觀るに、其裏面の心事大に憐むべきものがある、之を嘗て猛烈なる誘惑を受けしことなき人の陽はなる徳に比すれば却て大なる價値あるを發見するとあるは怪むに足らぬ」然り實に我々の淺き經驗を以てするも、過去を辿るならばかゝるときに、かゝりしならんには、かゝる罪をも犯したるならんなど明に見ることが出來るのである、同氏は尙下の如き適例を擧て居る「或切迫なる困難の場合に當り、其依托を受けて監守する所の金錢を私用し、速に之を償還せんと企圖せるも之を遂ぐる能はず、果ては盜罪の發覺せんことを恐れ、如何にもして之を隱蔽せんと、百方盡力する中、漸々罪に陷ること深くなり行きたる者あらん、而して右犯人と平素倶に事に從ひし一同僚にて其性質上毫も有德なりといふにはあらざるも唯同一の切迫なる誘惑に遭遇せざりし為正直の譽を得るものあるべし、或は又強劇急卒なる挑撥を蒙り、一旦の忿に勝へず狂氣の如く成り、而して恰も當時悪業を遂ぐべき方策の、

手中に在るを以て忽ち之を遂げ、故殺者となるものあらん、然るに右と同一の挑撥を蒙り同一の忿に至ると雖も幸にして當時斯る方策の手許になかりしを以て、同一の禍害を惹起さずして已む者あるべし、本來心性上決して十人並に下らざる德義あるものをして罪に陷るとあるは明瞭なる事實である」

諸君がこの話をきくならば家庭の不良なりし為に、打續ける不幸の為に、眼前の誘惑の為に、邪路に迷ひ罪を犯せる人を、隣人の中に、朋友の中に、見出さることならん、我々が若彼の如き家庭に人となり、彼の如き運命の悲酸を極め、彼の如き誘惑に遇ふも、猶毅然として正路を踏むことが出來たであらふか、甚だ疑しきのである、我々が今日迄幸にして法律上の罪人となることのなかりしは、そも何故ぞ、思ふてこゝに至れば、深く我々の幸を喜ぶと共に、彼等犯罪人の為に厚き同情をよせねばなりませぬ、況して宗教によりて我々の罪悪に付て自覺を有せるものが、如何して彼等を疎ることが出來ましやうか、見棄ることができましやうか」、同情この同情こそ實に彼を慰め彼を養ひ彼に生命を與るものであります、この同情こそ實に免囚保護の第一義でありますこの同情を欠きたらんには百の免囚保護院を建ても何の役にもたちませぬ、免囚保護の事業たる決して面倒なる組織や、特別の經驗や、資本などを要するものではありませぬ、單に我々が同情さへあるならば、刻下に出來る事業なので、着々と成蹟の上る、なか〳〵樂しきものであります、今日よりは、免囚といへば一も二もなく門前拂をなすことを止めて、少しでも改心の見込ある者ならんには、これを自家の工場に働かしめ、自家の田に耕さしめ、自家の店頭に、自家の臺所に使役すればよいのであります、これが私のいふ免囚保護事業の第一義であります、何と容易な事ではありませぬか、殊に彼の從順なる、彼の勤勉なる、彼の謙遜なるは、この經驗ある人の常に驚く所であります、彼は低き賃錢にも謝意を表し粗食にも滿足して居ります、彼は臭き飯を喰た覺がありますから、彼は決して主家に迷惑を懸るなどいふことはありませぬ、又免囚は我々の懸念する程再び罪を犯す、ものではありませぬ、昨年の統計表によりますと再犯以上のものは隨分ありますが初犯のものにては一割位のものであります、これも前に述たやうな次第で相當の衣食と相當の職業さへ彼に與へるならば殆どかゝることはないのであります、世の中に隨分免囚保護の事業を企てる人がありますが、先づ資本を募りて而して後にといひます、資本は容易に集りもしますまいが、思うやうに出來ると却ていかないのです、御金の下に集てくる人には碌な者はなきものであります、又御金が澤山集れば其資本を如何に處すべきかといふ事が第一の問題になりて意外なる虫がつきて、存外成績の擧らぬ者であります、多くの慈善事業に成功した人を御覽なされ、先第一に分相當の事業に着手するのであります、德孤ならず必ず隣あり不知不識の間に求めずとも、其事業を助る人ができて終に大なる事業ができるのであります、我々が免囚保護の實を擧るにも先づ第一歩より初めねばなりませぬ、徒に其聲を大にし龍頭蛇尾に終るの

は所謂佛敎家の事業の通弊であります、現に大菩提會の如きも今何をなしつゝあるのでありますか、愼ねばなりませぬ、

社會

◉明治三十三年を餞す

烏兎匆々として歲將に暮れなんとす、餘日幾干もなし、既往は咎めず來者追ふべしと云ふ、然れども吾人は既往を回想して轉た痛恨懊惱の情なき能はず、明治三十三年、一歲の間、多少の出來事を繰り返えて玆に縷述するは、聽て自家の失敗の歷史を告白するに異らず、言ふ勿れ失敗の歷史なりと、顧ふに吾人の智識は經驗によりて確かめらる、經驗の由りて來る所悉く失敗の結果に非るはなし、乃ち失敗の歷史を繰り返へし、來ん年を誡めんとするは人の當に踏むべきの道、强ち不可なりとせんや。

指を屈すれば、本誌の世に出でしより月を閱する二十有四、號を重ぬる四十五、彼の敎界の風波險惡にして怒濤天を捲くの時、薄志弱行の靡潮流に漂はさるゝことなしとせず、然れども吾人は未だ曾て毅然として其針路を變せしことなし。筆を執りて縱橫に論議し向ふ所敵なき如きものあり、一朝世路の難に際せば、忽然として其方向を轉じ俗流に投せんとす、如斯は吾人の共に齒するを恥づ、苟も社會に立て其主義を發表し實行を期して終始一貫時流を趁ふて走らざるは、竊に思へらく本誌の操守之れなりと、獨り吾人の恣にいふにあらず、吾幾萬の會員諸氏も亦夙に諒とせる所ならむ。

吾人の行動に對して世の幾多の批難の聲を聞けり、吾人は此等に向に猥に敵意を挾みしとなかりき、寧ろ忠實なる批難に就ては佛陀の福音として耳を傾けぬ、亭々として雲を凌ぐ松柏も時として風伯に惱まさるゝとあり、吾人は世の所謂批難と攻擊の焦點たらんことは、初めより豫期せし所にして敢て意とするに足らず、吾人を以て頑迷不靈極めて迂愚にして、世の進步と共に相容れざるを嘲るものあり、吾人は世の所謂進步なるものを解することを能はず、從て進步と共に相衒ふの意更になし、吾人は吾人の主義を貫き、吾人は吾人の抱負を行はん爲め、岐路に向て進むを欲せず、只邁往直進他を顧みるに遑あらざるなり、吾人の行動自ら行動するなり、吾人の靜止自ら靜止するなり、他の爲に動き、他の爲に止るはこれ吾人の欲せざる所、吾人の本領は別にありて存する也、是を以て頑冥不靈なりと謂はゞ吾人喜んで之を甘受せん而已。

將に去らむとする明治三十三年、一歲の間、多少の出來事を觀察し來れば、喜ぶべきか悲むべきか、將た慶すべきか弔すべきか、多少の出來事とは何ぞや、試みに二三を列擧せんか、吾人が滿腔の熱血を濺ぎて天下の同志と共に極力反抗せし宗敎法案の貴族院にて否決せられしは此歲なり、不良の年少者を收養せんとて感化法の發布せられたる亦此歲なり、宗派滅亡史の最初の頁に書せらるべき眞言宗紛擾も實に此歲なり、外には萬國宗敎大會あり、又淸國傳道問題の提擧せられたるも此歲なりき、其他敎育、政治の方面をも觀察しなば、例へ其梗概にても十を以て數ふべし、以上揭けたる宗敎界の

出來事は果して吾人に幾干の滿足を與へしや、宗敎法案は否決せられたり、これ眞に慶すべきか、而も完全なる宗敎法の制定は未だ俄に望むべからず、感化院の開設せしもの全國中僅に東京市一のみ、眞言宗の分離問題は歲將に盡きんとして紛擾の火の手愈〻熾なり、淸國傳道問題は二三有志の唇端に上るの外、有耶無耶の裡に葬了せられんとす、之をしも慶すべしといはゞ天下何物か慶せられざらむや、過去一歲間の事を回想し來れば吾人の志望未た萬分の一をも報ゆる能はず、轉た吾人をして悔恨煩惱の情禁ずること能はざらしめんとす。

將に來らむとする明治三十四年、この諸種の問題を如何に調理し、如何に解釋せんとするか、來年を語るは鬼ならざる人も之を笑はん、吾人は來春を待て筆硯を洗ひ決然として吾人の職分を盡さん、過去を談ずるは痴人の夢を說くに似たりと雖も、來ん年を誡め、過を貳せざるの微志に出るのみ、敢て功過を論んとするにあらざるなり。

本誌本號を以て本年の終刊となす、來春初刊は如何の面目を以て讀者諸君の面前に顯れんとするか、今說くを好まず、爰に聊か一言を發して謹て明治三十三年を餞す、往矣明治の三十三年

◉宗敎法案提出如何

余輩も亦聞く所なきにしもあらされども、頃來風說として傳はる所實に左の如し

伊藤內閣は前議會に貴族院が否決せし宗敎法案を第十五議會に提出せるならんとの說傳はるや同法案に反對せし僧侶等は過日來漸く運動を始め參々伍々車を連ねて當局者を訪問し提出の有無を確め居るも當局者にては未だ決定せずと稱し居れり蓋し當局者間には二說ありて前內閣の意見を繼承せんと主張する者と若し十五議會に提出せば僧侶は尙又前議會の如き秘密運動を再演し宗敎社會を益々腐敗せしむるの恐れあれば暫く其提出を見合せ時機を待つべし若し宗敎取締の必要ありとせば單行法律を制定して可なりと云ふもありて未だ決定せざるを實情とす多分十五議會に提出する事は見合すならんと云ふものあり

然れども秘密を以て唯一の政畧となす當局者の事なれば、いつ何時提出する事の計られざるは、固より覺悟せざるべからず、豫防線を講ずるは目下の急務に屬す、

◉第二十世紀大學傳道

日本全國に在る數萬の基督敎徒等、去月東京に於て開きたる宣敎師大會の贊成協力を得て明廿世紀第一月より、日本を全く敎化せるの目的を以て大學傳道をなすべし、歐米各國よりは多く知名の政治家、宗敎家、事業家等來遊して、此運動を助るとの事、彼等の傳道に熱心なる實に驚かざるを得ず、知らず我幾萬の僧侶は、新年を迎へ屠蘇を酌みつゝ陶然として春風に嘯き、太平無事を謳歌せんとするか、歲將に去らんとす、戰々として惟れ恐れ、兢々として惟れ畏み、曷んすれぞ來者を誡めざる。

◉各宗管長の運動

各宗派管長會議の決議に基き、總代管長より內務大臣に提出すべき、第十五議會に宗敎決案提出延期の申請書は、既に各管長の調印を終り去る六日內務省に提出したりと云ふ、申請書左の如し

近時宗敎界の法律現象は益々複雜を極め完全なる法規の制定を要するに至れり茲に於て衲等佛敎各宗派は聯合して本春更に宗敎制度及法規に關する調査の方針を定め廣く資料を歷史的及比較的に蒐集し宗敎法度の通素を索めんことを目的とし調査會を設置せり然るに我國宗敎法制定の困難なるは學者の齊く唱道する所なりと聞く況や衲等の研究敢て其完全を期し難しと雖ども苟も該法制定の曉に膺り直接其の利害を感ずるの大なるは衲等佛敎各宗派に於て最も多しとす故に日夜孜々として此の研究の目的を遂せんことを努め其の研究の結果を開陳して聊か法制調査の參考に供呈せんことを望むの念や切なり唯願ふところは政府衲等が微衷を容れ今期議會に對し該法案提出を猶豫せられ度此段申請候也

明治卅三年十二月

佛敎三十二宗派總代

天台座主　坊城皎然
眞言宗長者　長宥匡
臨濟宗相國寺派管長　中原東岳
淨土宗西山派管長　久田敎道
曹洞宗管長　畔山棋仙
眞宗大谷派管長　大谷光瑩
眞宗高田派管長　常盤井堯凞
日蓮宗管長　岩村日轟

◎西本願寺の潮流　從來の西本願寺は順逆の二大潮流混同して、一定の針路を取りて進むこと能はざりしに、近來調和的にして一路の潮水洵然として流れ去るを見る、これ洵に宗門の爲め慶すべき事なり、兎角人は感情的にして先進と後進相待ちて事を共にし功を分つことは最も易き事の如くにして其實最も難き事なり、同派有爲の少壯學士諸氏が皆本山當路者と意見合せずして職を他に轉じたる如きは、これ果して何の爲めなりしや、舊思想と新思想との衝突あらんも、所謂先進者が猥りに先輩風を吹かしたるに由らざるなきを得んや、本願寺派の如きは固より有爲の人士乏しきにあらざるなり、只人心の統一を缺き個々分裂し、連絡杜塞せられ、爲めに事業の効果擧らざるのみ、

今や潮流一變し曩に意見合せられざりし、藤井氏の如きも在英國新法主の監督を命ぜられ、水月氏の如き薗田氏の後任として米國布敎を命ぜられ、共に渡航の途に上りぬ、其他酒生、佐竹、堀等の少壯學士が皆同派敎育の爲め力を盡さるゝ事となりぬ、同派の事情に暗き吾人は其所論多少の誤りなきを得ずと雖も大體に於て正鵠を失はじと信ずるなり、

◎帝國東洋學會　新に起らんとす、發起者は常磐井（高田派新法主）渡邊、高楠、南條、村上、澤柳、三宅、上田、坪井等の知名の士にして其趣意幷に事業は左の如しと云ふ、

本會は東洋諸國に於ける言語、文字、宗敎、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する史實を現存の古文書に依り研究するを目的とす

現存の文書中、その材料最豐富にして、曾て學術的講究を經ざるものを一切藏經とす、その卷帙の夥しき實に八千五百三十四卷、加ふるに藏外の諸書を以てすれば、殆と萬餘に達せんとす、殊に我國には本邦選述大藏經の外、宋、元、明、淸、麗の各完本の現存するありて、佛敎典籍の完備殆世界無比と稱すべし、抑漢譯藏經の含蓄せる所は、他國現存の諸藏と稍その趣を異にし、獨宗敎、哲學のみならず、諸般の學藝に關する材料を包羅して餘さず、學術攻究に資する所亦實に大なり東洋の一大古學叢書と稱するも、亦過言にあらざるなり、而して之が對照研鑽の用に供すべき諸國異譯の經典も亦その數多く南方佛敎諸國の經藏は、既に印行流布する所となり、暹羅藏經全部、及龍動巴利書出版會社にて發行せるものも既に我國に入り、北方佛敎の典籍たる西藏々經も、之を得る將に近きにあらんとす、印度ニポール現存大乘諸典は、曩に歐米にて出版せるものゝ外、現に露西亞帝國大學內大乘書出版部、及印度カルカツタ府佛敎出版會社に於て修成せるものも多く、蒙古滿州亦夥多の譯書を有す、此等の諸書を對校し、その材料を自由に運用し、攻究討尋の結果を世界の學術會に貢獻し得るの地に在るもの獨我國學者あるのみ、故に我輩自ら揣ず、大方諸君の贊同を得て、玆に本會を組織し、內、藏經の內容を攻究し、諸般の材料を查定類聚し、外異譯の諸聖典と對照考覈し、その結果を編纂大成し本會の目的を達する第一段となさんと欲す

本會は藏經調查の事業終るを竢て、漸次他の文書の攻究に及ぶものとす

本會事業豫定

第一　印度百科叢書編纂

一、言語、文學　二、大乘諸派　三、小乘諸派
四、波羅門敎　五、ジヤイナ敎其他　六、六派哲學其他
七、歷史、地理　八、天文、算數　九、藥物、醫卜
十、神話、俗話　十一、工藝、美術　十二、經、律、論各書批評
十三、印度、支那、日本、朝鮮、西藏に於ける佛敎の特殊發達　十四、雜纂

第二、字書編纂

一、梵漢字書(大小)　二、漢梵字書(大小)　三、一切經事文索引字書
四、印度事物起源　五、佛敎人名字書　六、和譯佛敎字典

第三　論文出版

一、會員の論文學術上有益なるものは之を獨、英、佛等の諸語に譯し各學會に頒布す
二、外國學者の論文にして本會の目的に適切なるものは之を和譯し會員に頒布す

第四　原本調查

一、國外現存梵本探求、購求、調查　二、國內現存梵本探求、借覽、調查
三、本有今無梵本調查

第五　典籍出版

印度、支那、日本の選述にして殊に學術上價値ある書籍の出版

第六　原譯比較研究

巴利原本、梵語原本、西藏譯、支那譯、蒙古譯、滿州譯等に現存せる同原の聖書若しくは同問題に關する對照批判

第七　質疑應答

第八　日本佛敎敎學書組織

信界

浩々洞に於ける靜觀

多田鼎

拂曉、窓を推せば、落葉、雨の如くしげく、殘月氷の如く澄みて、老ひたる檜の梢にかゝれり。

われ、事を爲すや、先づ人の之を認め、之を知らむことを

思ふ。われ、友の爲めに行はむとするや、先づ之によりて、友が我に報ゆることあらむを望む。われ國の爲め、又道の爲めに働かむとするや、先づ國人が之によりて、われを尊び、敎界が之によりて、われを崇めむことを欲す。わが心は斯く賤しきに、尊きは月の影なるかな。世の人は凡て眠れる眞夜中を、かの月影は、獨り淸らかなる光をはなちて、常に倦むことなく、我等を護るなり。又尊きは落葉の聲なるかな。我等は皆深き夢に沈みて、聽へも爲さぬ夜の扃を、夜もすがらやすみなく打叩きて、我等に語るなり。われ願くは月影の心を我心とし、落葉の志を、我志とせむことを。

童子、巷に立ちて其友にいふ、われ笛ふけども爾等躍らず、われ哀をすれども、爾等胸うたずと。志ある者、世に向ひて、其警覺を促し、世に對して其反省をもとむ。されど世は冷然として之に應せず。人たれか斯時に臨みて、不平不滿の情なきを得むや。慷慨悲憤の聲この間に起る。されど翻りて之を思ふとき、豈に月影と落葉との志に耻ぢざるを得むや。

人のわれに應せざるを怒らじ。佛は常に我に應じたまふ。人のわれに背くを怨みじ。われ佛と常に倶に在り。

われ小なる分別の巷に迷ひ、狹き推理の霧に蔽はるゝ時、われ佛に遠かり、又之を見奉らず。されど嬰兒の心にかへり、朗らかなる天眞の故園にたち歸る時、大慈光明の御親は、常に我家にはゝ笑みたまふ。

われに人のつくれる錦繡の衣なし、されど我は佛の裰ひたまへる光明の衣を着、光明の褥に臥す。われに人のつくれる金玉の殿なし、されど我は佛の建てたまへる光明の家に在り、光明の國に住む。

最も近き佛を、最も遠くに尋ね奉るは誤れるかな。最も廣き佛の國を、最も狹く思ひ爲すは誤れるかな。

人の喜ふことにして、佛の喜ひたまはざることあらむ。その時は、われ之を行はじ。人の憎むことにして、佛の賞めたゝえたまふことあらむ。その折は、われ奮ひて之を行はむ。

人は死し、友は失せ、國は亡び、世は滅びむ。されど佛の心は、長へに存らへたまはむ、眞の理は、永劫の末かけて、消え失することあらざらむ。この心と、この理とに憑る者、即ち常住の生命を得む。

自ら常住の生命を得たりと信せる者は、世の人の喜ふ生を喜ばず、世の人の悲しむ死を悲しまず。そは世の人の喜ぶ生は、眞の生にあらぬを知ればなり。世の人の悲しむ死は、眞の死にあらぬを知ればなり。

かくの如き人、已に生を喜ばず。是を以て、もだえ苦しみて自己の生命を持續せむことを企てず。其死せざる可からざるを知れば、即ち莞爾として死に就く。自己の生を重せざるや此の如し。是に於いてか他の生をも亦重せず。故に必ずしも飢ゑたる者には、食を與へ、病める者には、藥を與へざる可からざるを思はず。他に對するや、唯彼が病みても病に苦しまず、飢ゑても飢を憂ゑざる大安住の心を得むことを欲す。是れ即ち大聖の心なり。財施を貴ばずして、法施を重しとしたまふ大聖世尊の本意は正にこゝにあり。吾友曰く、佛の心

は、飢ゑたる者に、パンを與へんとにあらず、病める者に藥を與へんとにあらず。飢ゑて悲まず、病みて驚かざる道を敎へんとにありと、われ之を聞て、言の至れるものと思ふ。夫の單に他の肉を救ひ、他の身を助け、單にパンを與へ、財を施して、救世の大事こゝに了れりとする者は、洵に誤まれるかな。

吾師曰く、生を見ず、死を見ず、唯天命に順ひ因緣の大法にまかす、聖賢の安住、こゝに存すと。是れ心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す者にして、始めて之に到ることを得む。

念々刹那、起りては又うせ、うせては又起る我一切の情想を、一たび至靈難思の大佛力の願海に託し了る時、我は復た我を見ず、他を見ず、唯暐曄煥爛たる光明の遍滿するを見るのみ。「大願海のうちには、煩惱のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり」。

「あさな〳〵報佛の功德をもちながら起き、夕な〳〵彌陀の佛智と共に臥す」、願くはわれ此功德により、この佛智によりて、長へに進み、長へに動かむ。

斯の如くわれ思ふ。されど我卑劣なる情慾の塵は、殆ど常に我この思を暗まし、我をして殆ど常に汚穢なる煩惱の淵に淪ましむ、わが此文を草する時、この汚濁、已に我心の上にあり。大悲光明の御親、願くは我をして、我の行修を進ましめ、我をして此煩惱濁惡の淵より脫せしめたまはむことを。」

浩々洞の門頭、山茶花さかりにさき、紅きと白きと、互に相まじりて、はゝゑむ。佛の御光は、こゝにも亦あらはれたまふ。

會報

米國通信の一節　　秦敏之

秦文學士より去月佛敎青年會諸氏に宛て通信せられたるものを、左に其一節を抄記して讀者の一覽に供す

（前文畧）當國に於ける宗敎思想は一樣ならず、從て御承知の如く基督敎のみが彼等を滿足せしむべき唯一の宗敎にては無之候、殊に實業家及勞働者の多くには宗敎が忘れられ居るものゝ如くに候、小生の當國に於て青年佛敎徒の開拓すべき廣き原野の橫れることを發見仕候、申上る迄もなく日本に於ける俊才は亞米利加に於ても俊才たることを得、又日本に於て相當の位置を有する人は、玆にも亦相當の位置を得ること難からず、然しこれには英語を自由に操ること必要に候、小生は衷情より日本青年佛敎徒に忠告仕候、事業を唯帝國內に止めず廣く世界の舞臺に上らんことを」當地に於ける政治熱は今や最高度に達し候、「レパブリカン及デモクラットの政黨員は毎夜市街又は廣場の隅にて演說仕候、こゝに注意を惹くべき一事は演說家が聽衆の意見に反對して深刻なる駁擊を試みつゝあるにも拘らず聽衆は其演說を妨るなどいふこと毫もこれなく候」帝國主義トラスト貨幣の自由鑄造は當時流行の問題に候、……ブライアン氏は演說の爲に國內を巡行否飛あるき居られ候、氏は實に繁忙なる亞米利加人の好見本に候、氏は一日に少くとも六回演說仕候、加之氏の通過する各停車場にて數分間の演說を強られ候、……昨日一日中に演說をなすこと二十八回、旅行道程二百五十哩、挨拶をなせし人の數は凡て二十一萬人に上り候由に候、「これは昨日一日中の仕事に候」マッキンレー氏の上流社會に勢力あるに反し、彼の勞働社會に於ける勢力は驚くべきものに候、兎に角ブライアン氏は當時必死になりて競爭致居候、これに付ても昨年宗敎法案に於ける近角眞岡兩君の運動を思ひ起し候、……當地の物質的進歩は到底筆紙の及ぶ處にては無之候、……

新刊批評

龍樹の佛教観（定價三十錢） 京都 爲法館

本書は畏友楠龍造君の近著にして、先づ印度佛教史上に於ける龍樹の地位より說き起し、佛教の最高目的は佛果にあり、若し之に到達せんと欲せば、必ずや因位の修行を經ざるべからず、品數階級の必ずしも無意義にあらざる所以を詳論して筆を收めぬ、章を分つこと十五、其間或は印度の二大思潮たる有空二論の變遷を述べ、異同を論し、或は龍樹の性行を語り、或は無宇宙論の基礎を說き、或は龍樹の他力教、龍樹の涅槃論、龍樹の佛陀等に論及し、行文敢て流暢ならずと雖も、君が多年研究の結果に成れるを以て、亦近來の好著たるを失はじ、本書の序言に曰へるあり、大乘佛教の歷史中最も重要にして、且つ興味深きは龍樹の研究にあるべし、と、洵に至言なり、苟も大乘佛教の研究に志あるものの、一讀せざるべからざるは、もとより論を待たざる所、本書は姉崎氏の佛教聖典史論と其體裁相同し、只紙質の粗なるは稍惜むべしとす、終りに臨み楠君に謝すべきは、余は本書に接し直に一言を紙上に紹介せんことを約したりき、而して例によりて俗務紛々四邊を圍み、未だ一日の清閑あることなし、玆に君の好意を空うするを恐れ、忙裡筆を執て一言僅に其責を塞くのみ、妄評多罪(劍虹)

熊本籠城談 定價三十錢 麹町區飯田町四ノ十一 有朋堂

丁丑西南の役は明治歷史上に標出せらるべき一大事變にして、就中異彩を放つものは熊本籠城の活劇是、風雨幾變遷、屈指すれば早くも二十餘年前の昔となりぬ、當時の模様は歲月と共に多く湮滅し人の知る漸く稀ならむとする今日、當年の參謀現參謀兒玉總督の口述に係かる實歷譚出づ、これ即ち熊本籠城談となす、轉去翻來、彈丸雨飛鮮血淋漓として紙上に迸り、或は悲壯、或は沈痛、時に慘憺、時に悽愴として冷氣人に迫り、其光景宛然身實境に在るの想あらしむ、而して五旬餘の籠城、外、援兵絕え、內、糧食竭き、粟を食ひ馬を屠り難くし、所謂孤城落日重圍の裡にありて命將に且夕を計られざらんとす、是に於て乎突圍の議案咄嗟の間に決し、諸般の準備成り拂曉を待て賊圍を突かんとする前宵の光景を描出して曰く

隨分大事に働き給へ、頼む、難有う跡の處何分宜しく、何か遺言でもないか、有らば今の中に、イヤ何もない唯跡の守備を宜しく、モー話と言ふても此れ丈じや、此外には言ふべき事もなければ聞くこともない、物を言ふにも成るべく聲を立てぬやうにして、城中闃たるが中に春の夜の段々と更けそめて、空しく高樓を照らす片割れ月の影も、春霞とやらに包まれてしやんらうかハ、薄ボンヤリとかすみ渡つて月だに涙ぐむのであるかと疑ふ許りで有つた云々

一言一句悉く血涙ならざるなし、卷首に谷將軍の題詩を掲げ、附錄として神風連談を載す、之を繙かば一讀三嘆の妙あるのみならず、士氣を興奮すること蓋し尠少ならざるべし、以て本書の價値如何を知るに足る(劍虹)

本部廣告

本會歲末決算上の都合も有之候に付、本誌代金相切れ或は未納の諸君は此際遲くも本月二十日迄に必ず御送金被成下度此段特に御依頼申上候也

附言、前號廣告致し候得共今以て等閑に付せらる方も隨分不尠候に付至急御拂込之程願上候也

明治三十二年十二月

大日本佛教徒同盟會出版部

廣告

講師 光遠院彗空師著述
嗣講 吉谷覺壽師校閲

御文歡喜抄 小本 全一冊 正價金參拾錢 郵稅 貳錢

御文は是れ眞宗の中興八代目の善知識蓮如上人宗意安心の手鏡となし末代の凡夫眞宗の流れを汲むの輩らの「カタミ」に殘させ玉ふの聖教なり

本書は眞宗の講師の第一世に位する慧空師此眞宗安心の手鏡たる御文の尤も解し難たく辨へ難たき所をのみ一々懇篤に解釋し以て後學の宗意を誤らざらんことを勉められたり此書殊に希れにして汎く世に流布せず本館今回此良書を得此が校閲及び訂正を吉谷嗣講に乞ひ玆に上梓出版することを得たり苟も眞宗の流れを汲むの人は僧俗の別なく擧つて本書を御購讀あらんことを乞ふ

京都市下京區下珠數屋町東洞院西入町
護法館 西村九郎右衛門

●眞宗要義通覽 全二冊 代價三十五錢 郵稅二錢

此書は有名なりし理綱院惠琳講師の撰にして眞宗の要義中の要義數ヶ條を簡易に教示せられたるものなれば眞宗の徒たる者學の淺深を論せず道俗を問はず必らず讀まずんばあるべからざるの最も緊要の書なり

●佛法三字經幷に畧解 全一冊 代價七錢 郵稅二錢

本書は一等學師香山院龍温師序文堀江慶了師の著にして初學の人は無論必讀すべき良書也

●日月行品台麓考 全二冊 代價三十錢 郵稅二錢

●視實等象儀詳說 全一冊 代價三十錢 郵稅二錢

●日本鎚 全二冊 代價三十五錢 郵稅四錢

右三書とも天文學に尤も有名なる佐田介石師著にして地動の說を破し天動なることを充分に說示せる良書なり

●僧侶必携學軌十則 全一冊 代價十五錢 郵稅二錢

本書は香嚴院慧然講師の遺稿にして質儀。立信。聲讀。方音。時制。僧服。創修。綱領。擇友。宗本の十則を擧て明說せられたる書なれば學道に志ある諸君は是非とも一讀すべき珍書なり

●學徒心得論題必用眞宗手鑑 全一冊 代價十五錢 郵稅二錢

此書は理綱院慧琳講師著して數十條論題を立て安心等を辨せられたる要書なり

●眞宗安心改悔文集說 全一冊 代價二十五錢 郵稅二錢

本書は占部觀順嗣講師著にして先輩講師方の安心を一々對照して教示せられたる者なれば一本を購讀して安心領解し玉ふべし

●淨土宗近道教道しるべ 全一冊 代價十五錢 郵稅二錢

此書は北畠淨鏡師著にして初に各宗耶蘇教等の教理を擧け終に眞宗の教理を擧け以て無宗教者をして我が宗教に歸入せしむるの良書なり

●二種深知釋講話 全一冊 代價十五錢 郵稅二錢

此書は有名なる櫟智藏師說にして眞宗安心の要義たる二種信知の釋を平易に論じ而かも道德を育するに要用の書なり

●釋教玉林和歌集 全一冊 代價二十五錢 郵稅二錢

此書は淨信房辨阿師撰にして佛法の尊きに念佛の有難ことなきを安らかによみつらねたれば女人子供まで解し易く信心を增すの良書なり

擬講 蓮元慈廣說 勸學 占部觀順說

御垂示顯正錄
讀御垂示顯正錄 並附錄 全 定價十錢 郵稅二錢

當御垂示顯正錄は蓮元擬講先きに嗣講占部觀順師御垂示に(明治廿三年大谷派當法主現如上人ノ御裁決ノ書)付き御垂示頂戴錄を著はされしを非とし一々先輩の說を擧け喝破し更に正義を顯示したる快又快なるの書なり

又讀御垂示顯正錄は蓮元師の難破に付き具さに聖教の文證と及び聖教に順するの理證とを以て一々之を返難し實に事の見事に彈斥せられたり復た附錄は即ち此が附錄にして前編に餘す所を增補せられたるものなり

右兩師の著書に就ては其何れか正、其何れか邪なるかは乞ふ御一讀の上聖教の規矩と先轍の指南とにより任意に御判決あらんことを是れ本館の切望する所なり

當書の如きは時節柄(眞宗安心大紛擾の)當眞宗の御僧侶御同行の方には是非御購讀御一覽ありて然るべし

京都市下京區下珠數屋町東洞院西入町
西村護法館

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

信仰の餘瀝

全一册
寸珍美本

●特別減價當分の内一部金十錢●郵稅二錢●郵劵代用一割增の事

本書は著者曩に一たび政敎紙上に掲げ、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、吾人人生の大問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして戞然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。

淸澤師本書に序して曰く、
宗敎は人心をして其根帶を自覺せしむるものあり、信仰は即ち其自覺あり、社會にして宗敎を欠くは、其發展の一大要素を欠くなり、個人にして信仰の立たざるは、未だ其根本的不明を斷ぜざるあり、吾人の從來する所如何、吾人の趣向する所如何、吾人の價値は如何、吾人の運命は如何、凡此等吾人々生の最大問題は、一として最後の信仰に繫屬せざるものあることなし、宗敎的自覺の世道人心に必要あること論を待たざるなり、（略）近時宗敎を喚呼する聲の甚大にして信仰を告白する說の甚盛なる如きは皆以て徵とするに足る、近角君の如きは最早く此聲にき、最早く此告白を試みたる一人なり、（略）これ固より君が信仰の餘瀝に過ぎざるもの、未だ以て君が信仰の全般を盡す能はずと雖も、君か如何に宗敎を觀取し、如何に之を實驗し、如何に之を玩味せるかは、此數篇の間に於て之を瞥見し得べきが如し云々

苟も宗敎的信念に厚き士は、一本を座右に供へ熟讀玩味せられむことを希ふになん、以て本書の價値如何は呶々の辯を費さずして可知也、謹で告く

注意｛本書は前金にあらざれば送本せず●十部以上割引す
　　　照會は必ず往復はがきに限る事

本月二十五日發賣　着金の順序によりて送本す

發行所　◎東京本鄕森川町一番地　大日本佛敎徒同盟會出版部

明治三十一年十二月二十六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十二年十二月十五日發行〇每月二回（一日、十五日）發行
政敎時報第四十五號